フィードバック《脱皮》2011

以前からセミや蛇の脱皮後の抜け殻が気になっていて、ふと自画像のように見えたときに妙に納得したことがありました。始めは単にその造形に惹かれていたのですが、成長と身体の形を残すという二つにの行為が同時に起きている様子が、私たちの表現の役割に近いのではないかと思えたからでした。

記憶が正しければ、私は十四、五の頃、初めてちゃんとした自画像を描きました。きっかけは、自画像を通して描く技術や人体の見方を訓練することを知り合いから勧められたからです。初めは自分の顔を描くなんて気持ち悪いことでしかなかったので、あまり好きではありませんでした。しかし、いつの間にか心境は変化し、悲しい時や落ち込んだ時に気を紛らわせる一つの手段として自画像を描くようになり、二十歳をすぎるまで、自画像を描くときは落ち込んだ気持ちに従事していました。そして、いつだったかはっきりと覚えていませんが、私は自画像を描くことをぱったりとやめました。

そしておそらく自画像を描くことをやめてから四年ほど経った後、過去の自画像を見返していた時に、当時は、ただただ自画像を通して自分を感傷的に眺めていたのだと気づきました。悲しい時や落ち込んだ時に描いていたので当たり前です。けれども、それはただ憂鬱な感情を表すだけではなく、良い意味でもがき苦しんでいるようにも見えました。その数十枚の自画像は、青春の香りがする無意識そのもの、もしくは自己愛そのものとでも言うのでしょうか、おそらく今となってはそのように狙って描けるものではありません。それゆえ、その勢いやひたむきさに魅かれるものがあり、未熟な自分にもかかわらず、現在の自分よりもよっぽど生で純粋なことをしていたように思えました。

この思いは、おそらく誰もが持っているであろう過去を懐かしむ感情で置き換えられるかもしれません。私にとって懐かしさとは、脇目もふらないで、ある意味動物的に何かに集中していた限られた期間です。そして、それらがもう帰ってこない時間と確信できることも、そうして思いを巡らしている時間が心地よいことも、自画像と向き合う感情と共通しています。しかし、当時の自画像に対する憧れは、懐かしさだけによるものではなく、志の純度に相応しているのだと感じました。

私がなぜ純粋さを求めていたのか、それはおそらく、私が制作の際に起源的な衝動や動機をきれいに処理することに違和感を感じていたからです。また、そんなときに脱皮の抜け殻や掘り起こされた自画像が、表現として単純に格好良く見えたからだと思います。それゆえ、少し立ち止まって脱皮行為について考えました。脱皮は、大げさに解釈を広げれば「生が始まったときから死へ向かっている」のではなく、「いかに運命に抗い前進するか」という決定的な生物の生き様そのものの切実な主張でした。この切実さは、ひょっとしたらかつての自画像にも当てはまるかもしれないことだったので、今の自身でもそれが体現可能かどうか単純に見て見たくなりました。

私は実際に成長できるかを確かめるために擬似脱皮を実行しました。もちろんその脱皮は私にとって生きるために必要ないことから、行為する以前から本当の意味で脱皮が成功しないことはわかっていました。しかし私にとって、成長するために脱皮をしようとするのではなく、「表現として脱皮を体現し、成長できるかどうかを確かめる」ということが重要でした。ようするに、将来懐かしむ瞬間を意図して作ろうとするように不自然なことを試みるのではなく、私にとっての自画像のように、意識下で自身のそのままの容態・精神を留める点を作る、そしてその点が私の時間軸の上でどのように働くのか長い目で見てみるという意味です。そして一度目の脱皮の後、2013 年には Hohenloher Kunstverein で二回目の脱皮を行うことになりました。この時は一度目の脱皮の経験をふまえ、行為を実験としてではなく「行」のような行為と位置付けて行いました。

これまで行った二度の脱皮は、自画像を描いていたときとは少し違いますが、いずれも精神的な苦しさから解放されたいという思いに基づいていました。脱皮行為は、身体にも強い記憶を残し、自身の抜け殻ができたことで確かにそうした欲を満たしてくれました。しかしそれらを通して成長できたかどうかはわかりません。強いて言うなら、これまでの二回の脱皮のそれぞれを通して転機や良縁に恵まれ、それによって生活に変化が生まれたことが、人間の脱皮の第一歩といえるかもしれません。しかし、行為後にそれよりも大事だと気づいたことは、ただ脱皮をすれば何か

が変わると信じられる選択肢を手に入れられたことです。つまり、自分が変わる、または成長できることが一番に大切ではなく、自分が後ろめたく思う感情を認め、その結果残った物体が将来の自分、または他者に見られると決定した時点でとりあえずは成功なのです。そういった意味で、これからは表現として脱皮の真実に言及するというよりは、やはり身体感覚のほうが敏感で常に優先されるので、儀式や修行のようなものとして脱皮に向き合う方が自分にはあっていると感じます。